

あやかしのひそむ森 ―妖怪学から環境問題へ

菊地 章太（東洋大学ライフデザイン学部）

東洋大学の菊地章太と申します。今ご紹介頂きました「妖怪学」の講義を担当するにあたりましては、大島先生のたいへんなご尽力で実現したものですから、大島先生のご命令には私は逆らうことができないという、そういう立場にございます。妖怪学と環境問題ってどこか繋がる場所があるのだろうか、というお話を最初に頂いたのですが、これが大有りでございまして、むしろ環境問題というのは妖怪っていうことの本質に繋がるのではないかといいぐらい大事な事なのではないかと考えております。実はですね、今日この同じ階でもう一つ、エコ・フィロソフィのシンポジウムをやっているものですから、ちょっと気になったので、先ほど会場を見に行きましたら、この部屋よりも広い部屋なのだけでも、こちらの方が人数が多くて、平均年齢もお若い方が多い、女性の方もきれいな方が多いという、ひとえに大島先生のお力かなと。それでは、映像を進めながら話を進めさせて頂きます。

大島先生から最初頂いたテーマというのはここにありますが、統計数理研究所の調査を通じて「心のなかにある環境問題をさぐる」という、そのための方向性を吟味するということでした。この、上と下、前半と後半のこの不一致といいますか、ここに惹かれたのですが、そもそも統計や数理、それから調査と、どれも自分には全く無縁の世界のことです。私はカトリックの神学が専門なのですが、この神学というのはこれまた、ありえない神様をすべての中心にすえて世界を眺めるという、とんでもなく架空の学問といいますか、虚構の世界のことです。と申しまして、これこそヨーロッパの最も伝統的な学問なのです。そもそも大学というものが神学部から始まっておりますから、実に 800 年の歴史を持っているのです。私が若い頃に留学していました南フランスにある神学大学は、13 世紀の創立なのです。この神学に比べたら、哲学というのは十分実学でありまして、なにしろ普通の常識で理解できる範囲でものを考えるのですから、とても堅実な学問なのです。おそらく哲学者から見たら神学ぐらい嘘くさいものはないだろうと思いますが、神学者から言わせれば、哲学なんて世の中に迎合しているだけにしか見えないところがあります。ですから、私はこの哲学館が元になっている東洋大学にいる限りは、八方敵だらけですけど、それに輪をかけてですが、大学で妖怪学の授業をしているなんて言おうものでしたら、十中八九、バカにされるのがオチでありまして、「それ本気で？」とか平気で言われてしまいます。何しろ法律とか経済の研究というのは、これは高級なものである、妖怪なんて研究するレベルのことではない、というふうに。ただ、これもついでですから申しますが、ヨーロッパの大学でしたら、このミステリアスなものの研究というのは、むしろ最もアカデミックな場で行われるものなんです。人智を超えたものに向き合う、そのためにあらゆる智の領域を総動員する、そうしたもののへの畏敬の念、あるいは知的好奇心というものを、これ

をやっぱり何百年も伝統を持つヨーロッパの大学っていうものは、ずっと持ち続けているわけです。ですので、今日のこのシンポジウムは、東洋大学では珍しく真にアカデミックな企画なのでございます。それはともかくといたしまして、この統計数理研究所の調査を通じて心の中にある環境問題を探る、というこの後半部分、この「心の中にある」というのが大変すばらしいと思います。これはもう、心情的な問題になりますから、全然割り切れるものではありません。ですので、個別的ですし主観的ですし、超えていくところもある。そもそも人の心の中なんて言うのは、これは身もふたもない言い方をしてしまえば、理論も論理も理性も関係無い、哲学者でしたらそうは考えないかも知れませんが、感情で動いている動物がすなわち人間ではないか。こうなりますと実に神学的なテーマでありまして、これなら私でも何とかすこしは言えるかな、と思った次第であります。

それでは本題に入りたいのですが、部屋を暗くして映像をご覧頂ければと思います。

スタジオジブリのこの「もののけ姫」、ご存知の方も多いと思いますが、今の大学生はこのジブリを見ながら育っていますから、授業でもこれをよく取り上げるんですね。この「もののけ姫」の中に、「こだま」という森の精が沢山出てきます。ご覧頂いている、この白くて何かへんてこりんな生き物、これが森の中に沢山住んでいます。これはご覧の通り、どう見ても実在の生き物ではなさそうですから、これを敢えて分類するなら、やっぱり妖怪ということになると思います。妖怪というのは、実在しない不可思議な存在、ドライに言うのでしたら人間の想像の中での存在、つまりイメージの産物ということになると思います。この「もののけ姫」の話の中には、今ご覧頂いているような壮大な森が出てきます。そこに「こだま」という妖精が溢れていて、その森は生命に溢れている。やがてそこに森の神様が現れます。それは人間に殺されてしましますが、それとともに森も死に絶えてしまいます。そのときに、「こだま」たちも次々と死んでしまう。森がなくなってしまうと、「こだま」は生きていくことができない。ですけれども、やがて、これは自然の大いなる力、回復力によって森は少しずつ元の姿を取り戻していきます。そうするとまた、「こだま」も少しずつ生き返ってきます。ですから、自然が生きているところに妖怪も生きている、そう言っているわけです。私たちが安心して暮らせる環境というのは、きっとおそらく妖怪にとっても安心して暮らせる環境ではないのか。妖怪がいなくなった世界、それは果たして人間が安心して暮らせる世界なのか。もちろん、このアニメを見ながら、いちいちそんな理屈っぽいことを考えているわけではないのですけれども、ちょっと立ち止まってみますと、そうしたメッセージを読み取ることもできそうな気がいたします。

妖怪って、私たちが知っている生物の中には分類できない、というだけではなくて、私たちが普段抱いている価値観の中にも入っていない存在と言えると思います。私たちの価値観を変えてしまうもの、あるいは私たちの常識に疑問を突きつける存在と言えるのではないのか。もちろん常識は大事ですから、常識を壊されてはかなわないのですが、でもいつもそうかと言いますと、どうもそうとばかりも言えない。実は私たちの心の中には、黒々としたところが結構ありまして、これはもちろん個人差がありますから、稀には真っ白という方がいらっしゃるかもしれませんが、天使でもない限りは、

大なり小なり黒々としたところがあるのがむしろ正常ではないか。常識なんか糞食らえとまでは言わないですが、既成の秩序に反してみたい、あるいは安穩な常識を壊してみたいっていう、そういう破壊衝動というのは心のどこかにあるかもしれない。特に、伝統ですとか秩序ですとか、そういうものを強制されますと、そういった破壊衝動がムラムラと湧き起こってくる。ただ、何もかもぶち壊してみたくてしまう、というのはむしろ、人間の心の安全装置かもしれないと思う時もなくはないのです。伝統だ、秩序だ、現状維持だ、そのようなものはもういい加減うんざりで、どん詰まっていて身動きもとれなくてもう息苦しくてたまらない。そんなものを片端からひっくり返して、まるごと全部否定してくれるようなものが、突然どこかから、外から現れて、強力なパワーで有無を言わずに変えてくれる、そういうあぶなっかしいものを心のどこかで期待するときがあるわけであります。

このドラキュラなんていうのは、これはルーマニアが原産だそうですが、登場したのは 19 世紀のイギリスであります。大英帝国の繁栄している、そのどん詰まりの閉塞感が充満している、そういう時代に登場しました。ヴィクトリア朝の大英帝国の秩序、これをズバズバにしちゃうようなデストロイヤーとして登場したわけです。とは言いましても、このドラキュラは革新的なリーダーなんかではまるっきりのですね。それどころか、ご覧の通り、どうしようもないほどの懷古趣味のジェントルマンです。えらく古びた館に住んでいますし、このドラキュラの棺桶なんか、ディズニールンドのホーンテッドマンションにでもありそうな、すごく古風なスタイルですよ。それから十字架に弱いなんていうのも、そうとう古典的です。じゃあ、なぜそんな古くさいのが、この伝統と秩序の破壊者になったのかと考えてみますと、まずこの場合の、その伝統と秩序というのが具体的に何を指すかと言いますと、それは先ほど申しました大英帝国のヴィクトリア朝時代の今に繋がっている伝統であります。彼らの今現在を形作っているところの伝統と秩序なのであります。さてその、今を破壊する存在というのはどこからやってくるのかと考えますと、二つ考えられる。一つは未来から来るタイプ、もう一つは過去から出て来るのではないか。この UFO とか宇宙人というのは、これはもちろん未来からやってくるタイプですね。この空飛ぶ円盤などは、近未来型でないとしても様にならない。年代物の円盤だと故障したら宇宙に帰れない。この写真はまさにそれで、木に刺さったまま動けなくなってしまったドジな UFO であります。ところが妖怪は違って、その反対だと思います。過去からひょっこりと出て来るのが妖怪ではないか、一昔も二昔も前の世代というものを体現している。だからこそかえって、今を否定することができる、現在の伝統と秩序を破壊することができる、別の価値観を携えているわけです。ドラキュラがまさにこのタイプですけれど、ドラキュラだけではありません。妖怪はだいたいこのタイプに属しているのではないのでしょうか。

妖怪はどいつもこいつも、過去からのこのこ出て来る生き物であります。今風の妖怪なんて見たことありませんが、そもそも本物の妖怪を見たことがありませんが、もしいるとしても、古風な姿かたちをしているというのが、たぶん正統派の妖怪に違いない。古いお寺ですとかお屋敷に住んでいるというのは、標準型の妖怪であります。今ご覧頂いているこれ、『遠野物語』の遠野で買ってきま

したご当地キティちゃんです、キティちゃんの座敷わらしですね。ご覧の通り、おべべを着ていますし、髪型なんかおかっぱで、これ実に古風ですね。ノスタルジック、いかにも郷愁に溢れています。間違いなくこれは故郷に繋がっている、とっていいと思います。子どもの頃、田舎の奥座敷がおっかなかったという、そんな記憶と結びついているに違いないと思います。

私は横浜の街中で育ったものですから、小さい頃、50年前の都会はもう既に、夜は真っ暗じゃありませんでした。でも祖母の田舎は東北でしたから、夏休みに泊まりに行きますと、夜は真っ暗で、本当に何も見えない。便所が外にあったのですけども、便所の先はまさしく漆黒の闇。小さな子どもは漆黒なんて言葉は使わないですけど、何も見えない真っ暗闇だったのです。つい半世紀ぐらい前は、まだそれが当たり前だったのだと思います。もちろん、子どもの時はおっかなくて仕方ないですから、婆ちゃんにしがみついて便所に行ったなんていう情けないガキでしたが、今にして思えば、夜は闇だった、その頃が懐かしい気がいたします。私は今、水戸に住んでいるのですけども、一昨年のあの東日本大震災で、二日間電気が来なくて真っ暗だった時があります。何もかも真っ暗の夜っていうのは実に何十年ぶりかで体験しまして、どうせ勉強はしませんが、電気もついてないからおさら勉強できませんから、ぐっすり日の入りとともに寝て、日の出とともに起きるなんていうのが何十年かぶりにありました。もちろん、被災したところではそんなのきなことは言っていられませんが、そういうことを経験いたしました。真っ暗な闇夜が恐ろしいという、そういう記憶っていうのは、これは個々人の記憶でもありますし、もっと言えば民族の記憶、さらにもっと言うと人間という種族の記憶であるのかもしれない。怖いものの記憶っていうのは、これは人間にとっては必要なものかもしれないと思います。このことはまた後ほど出て参りますが。

これは、西アジアの文化人類学を研究していられる先生から伺った話なのですが、遊牧民の社会では妖怪や幽霊の話っていうのはあんまりないそうです。特に怨霊型の幽霊の出現というのは至って少ない。そもそも、人と人との間に何かのわだかまりが生じなければ、お化けが出て来る理由というのがない。もちろん、遊牧民だって恨みがないわけじゃないし、いじめがないわけではないのでしょけれども、彼らは一ヶ所に定住していませんから、もしも人間関係に歪みが生じてしまったら、お互い住んでいる場所を換えればそれで済むことです。いじめが継続されない、怨念が蓄積されにくい、従って妖怪も幽霊も出て来る機会がほとんどないということになるわけです。ですから、妖怪や幽霊っていうことも風土的な要因、あるいは環境的な因子、ファクターっていうものが大きく関わっていると言えそうであります。その点でいきますと、この日本社会というのはその対極にあります、なんといいましても典型的な定住型村社会でありますから、嫉みだのやっかみだのがオンパレードで、学校でも職場でも陰湿ないじめが繰り返される。しかも、見て見ぬふりのパラダイスですから、恨みが渦を巻いて怨念が蓄積されて怨霊が大量発生する、そういう社会に私たちは暮らしているわけです。ですから、幽霊や妖怪があちこちで泣いている、それが日本の精神的風土、社会的環境と言っているわけです。もちろん、このいじめられた人間の復讐というのは必ずあり、それは凄まじ

いものだということを、私たちはもっと怖れなければならないと思います。いつか必ず復讐される、これは生きているうちじゃなくても、死んでからでも必ず復讐される、っていうそういう恐怖が、今あまりにも希薄になっているのではないか。日本の幽霊話なんていうのは、大半は、いじめられた人間の死後の復讐とっていいくらいです。恐怖の必要性が薄れ、畏怖する対象が欠如してしまって、呪いなんて今更だれも信じない。だから、いじめもパワハラも日常茶飯事になってしまって、しかも、みんな知らんふり、という社会にいつのまにかなくなってしまいました。怨霊に怯えるとか、妖怪や幽霊の怖さにだまされるということが、もしかしたら、実は今ほど必要な時はないのではないかなというふうに私は感じております。

妖怪なんかに騙されちゃいけないのだ、というところから、先ほど大島先生のお話がありました井上円了の妖怪学というものは始まっております。時代は明治の初め、文明開化のまっただ中でありますから、まだこの時代、人々はむやみやたらと妖怪を怖がっていたので、そんなものを怖れちゃいけない、妖怪なんて本当は実在しないのだ、そんなものは迷信に過ぎないのだということを、合理的で実証的な精神に基づいて解明していく、そういう時代に登場して先陣を斬ってきたのが円了の妖怪学だったわけであります。ですから、妖怪という迷信を撲滅するため、円了は妖怪を研究したわけであります。

ところで先ほど、私は妖怪の怖さに騙されなくてはいけないのだ、と申しましたが、これじゃあ、この妖怪撲滅を目指した円了の姿勢とは正反対になってしまいます。でも、円了が妖怪学を始めた時代と現代とでは、妖怪学が目指すべきものも自ずから変わっていくのではないかな、そのように考えております。

これは、闇夜の晩に狐が松明を口にくわえて集まっていますが、『東海道五十三次』の絵師である歌川広重の作品であります。安政四年の作品、これは円了が生まれる一年前、なんと明治維新のほんの十年前に作られた浮世絵なのです。で、この十年後には文明開化を迎えますから、街にはガス灯が灯ろうという、そういう時代です。もっともそれは都会の話でして、日が暮れてしまえば村の夜は真っ暗で、闇夜のあやかしの世界が、なお人々の日常を支配していた、そういう時代でありました。円了は越後の国、新潟のお寺の息子であります。お寺の周りには自然が沢山あったでしょうし、闇が沢山あった。闇の中には狐や狸だっていた。狐だけじゃなくて、人魂が飛んでいたり妖怪が潜んでいたりする、とそう信じられて怖れられていたわけです。この、ご覧頂いている写真は、人魂が飛んでいてるだけです。ご安心頂ければと思いますが、どこが安心なのかわかりませんが、人魂なんてそんなものは迷信に過ぎないのだから、自分の目で確かめてそのうえで判断しなくちゃいけない。時代は文明開化の世の中なので、科学的に合理的に世の中を見据えないといけない、円了の時代でしたからそうやっただけに違いありません。だからこそ、妖怪なんていうのは迷信に過ぎないということを科学的に合理的に解明する、科学やあるいは哲学の可能性を信頼する、そういう時代だったわけです。

では、今はどうなのか。円了の時代に日本列島に溢れていた自然は、もうだんだんなくなりつつあります。闇夜なんて本当になくなってしまいました。科学が発達して、もはや誰も人魂なんて信じないし、妖怪なんて信じないし、自然界には怖ろしい物などもう何もない。そういうふうには私たちは錯覚しきっていたわけですが、一昨年、そうではないのだということを身をもって知らされました。科学技術の粋を集めて造られたものが、津波の一撃でもろくも崩れ去った。それを私たちはとんでもない犠牲を払って、今なお払い続けながら思い知らされている。円了の時代も円了の妖怪学も、もはや過去のものであります。むしろ今だからこそ、環境ということと妖怪とが、円了の時代とは違って逆に結びついていかなければならない、そういう時代が来たのかも知れません。

話がだいぶでかくなっちゃって、なんだかもうほとんど誇大妄想的な神学のレベルになってきましたけど、聖書の中にこんな言葉があるのです。今更、神学者ぶってもしようがないのですが、神を恐れることは知恵のはじめである」(旧約聖書「箴言」)。このことは、とても面白いと思います。なんといいましても、この当たり前なところがすごい気がします。考えてみますと、神様だとか悪魔だとかそんなものは迷信なのだ、いつまでもびくびくしてはダメだ、というのでしたらなんとなく話はわかりやすいと思います。だって科学は、むしろそういうところからスタートしたぐらいですから。でもそうではないのではないか、今後どんなに人間が賢くなったとしても、それでもなお、私たちの力を遙かに超えた何者かが世の中にはあるかもしれない。そういったものに対して怖れを抱く心を失わないで、その前で自分たち人間の無力さを自覚する、それが本当の智慧というものではないかと思えます。もちろんそれを神と呼んでも呼ばなくてもいいのですけれど、どちらにしても、そういったものに向き合ったところで、取るに足らない自分たちの姿を思い知る、己の小ささをわきまえる、そういうところから本当の智慧への歩みが始まる、そのように理解できるわけであります。この「神を恐れることは知恵のはじめである」という言葉の、この神という言葉ですが、これを自然という言葉に置き換えてもいいかもしれない、そのように考えております。

最後にジブリがまた出てきますが、この『となりのトトロ』ですけど、これもやっぱり取えて分類するなら妖怪という以外にはないのでしょうか。それにしても何故「となりの」なのか、なんてことを大学の授業で哲学の時間とかに話したりしていますが、もちろん答えなんかありませんけれど、自分ならこう考えるっていう道筋ぐらいはつけてみたいなと思っているのです。世の中には科学的な知識や論理的な思考で割り切れないものは沢山あります。そのはずなのに、その一方で、人間の理性を超えた不可思議な存在というものは今やなくなりつつある。そんなものに怖れを抱いたり、あるいは親しみを抱く、なんていうことは、子どもが大人へ成長するにつれて、あるいは社会が進歩するにつれて減少していく。そんな不可思議な存在を、このアニメの『となりのトトロ』の中ではお化けと呼んでいますけれども、そういう不可思議な存在というのは、スタジオジブリの他の作品にもしばしば登場します。先ほどの「こだま」がそうですし、あるいは『魔女の宅急便』の中で都会の大通りに突然、箒に乗った女の子の魔女が現れたりしますけど、周りの人はたいして驚いた様子もない。そこでは魔

女も人々の暮らしの中に溶け込んでいるわけです。そんな不可思議な存在と共生していくこと、その大切さを忘れちゃいけない、それがジブリの全体に繋がるメッセージのような気がいたします。私たちの身近に、つまりすぐ「となり」にお化けはいたのだし、今も本当はいるのだけれど、大人はそんなことを今更信じてないですし、会いたいという好奇心もないし、余裕ありませんから、だから会うことが出来なくなりました。でも、お化けはいると信じている子どもたちならば、会えるかも知れない。もちろん、いつでも会えるってわけじゃないけれども、今も私たちのすぐ「となり」に、すぐ近くにいるに違いない。だから『となりのトトロ』なんだと思います。

トトロのいる森がかつて広がっていた、そこには闇があった、そこには妖怪がいた。それは、実は私たちにとっても一番住みやすい環境、一番暮らしやすい社会なのかも知れません。もちろん、森がなくなったからといって闇がなくなってしまったわけではなくて、都会の闇というのは実は沢山あります。妖怪の棲息場所だって、田舎から都会に移ってきた。今、民俗学の世界では都市の民俗学というのがとても盛んですけれども、相変わらず妖怪現象や幽霊話は後を絶ちません。でも、そうしたものがいまだに流行してどこかで恐怖に怯えるという思いを大事にしておく、実はそれが人間の健全な精神なのかもしれないと思います。かつて妖怪が棲息していた自然環境が激変してしまう、その存続がもはや抜き差しならなくなってしまった今だからこそ、なおさらに、妖怪学と環境問題の繋がりは大きくなっている気がいたします。

というわけで、統計数理研究に携わっておられる先生方のお化け調査と環境問題という、実に興味深いアカデミックなお話を今から聞けるのを、私もとても楽しみにして参りました。以上で私のお話を終わらせて頂きます。